

成川遺跡第4次2020年発掘調査速報

A Prompt Report of the Fourth Excavation on 2020 Season at Narikawa site, Kagoshima

竹中 正巳¹⁾, 大西 智和²⁾, 鐘ヶ江 賢二³⁾, 中村 直子⁴⁾,
松崎 大嗣⁵⁾, 中摩 浩太郎⁵⁾, 鎌田 洋昭⁵⁾, 新垣 匠⁵⁾

Masami Takenaka, Tomokazu Onishi, Kenji Kanegae, Naoko Nakamura,
Hirotsugu Matsuzaki, Kotaro Nakama, Hiroaki Kamata, Takumi Arakaki

¹⁾ 鹿児島女子短期大学, ²⁾ 鹿児島国際大学国際文化学部, ³⁾ 鹿児島国際大学ミュージアム,
⁴⁾ 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター, ⁵⁾ 指宿市教育委員会

本稿は、2020年8月24日から9月16日まで行われた鹿児島県指宿市成川遺跡の第4次2020年発掘調査の成果速報である。弥生時代に立てられた立石と4基の新たな古墳時代土墳墓が検出された。2020-1号墓上には、鉄製三葉環頭大刀柄頭が供献されていた。古墳時代後期の地表面には穴が開いた大型の壺型土器が並んでいる様子が確認できた。調査区の東側には板石の堆積群が検出された。

Keywords : Narikawa site, human skeletal remains, menhir, protohistoric Kofun period, Yayoi period

キーワード : 成川遺跡, 古人骨, 立石, 古墳時代, 弥生時代

1. はじめに

鹿児島県指宿市山川成川に所在する成川遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺跡である。1957年（昭和32年）に発見され、これまでに4次にわたる発掘調査が行われた（河口ほか、1958；田村編、1974；鹿児島県教育委員会、1983；竹中ほか、2020）。300体を超える人骨に加え、鉄製の刀や剣などおびただしい数の遺物が見つかっている。

南九州では、古墳時代の人骨の形質に地域差が指摘されている。宮崎平野部と内陸部の地域差、薩摩半島南端から南西諸島にかけての南西諸島の人々の存在である。この立論の根拠の一つになったのは薩摩半島南端の成川遺跡から出土した人骨の形質であるが、それは発掘調査時の現場での計測や観察所見によるものである。過去の調査で相当数の古人骨が出土したにもかかわらず、保存状態が非常に悪いため、骨や歯がわずかに遺存するだけであった。成川人骨の形質の再検証は不可能な状態であった。

竹中正巳らは、2019年8月から9月にかけて、薩摩半島南端の古墳時代人の形質的特徴を探る上で鍵となる成川遺跡を営んだ人々の人骨の検出を目指し、約40年ぶりに同遺跡の発掘調査を行った。墓域の広がりを確認し、古墳時代の土坑墓2基（2019-1・2号墓）から、新たに2体の古墳時代人骨を得た。しかし、2体とも人骨の保存状態はよくなかった。

2019年の発掘調査に引き続き、竹中らは2020年8月から9月にかけて成川遺跡を再発掘した。本稿は、この成川遺跡第4次2020年発掘調査の成果速報である。

2. 調査成果

第4次2020年調査は、2020年8月24日から9月16日まで行われた（図1）。2019年調査時の5トレンチと6トレンチを含む範囲に調査区を設定し、これを7トレンチとした（図2）。7トレンチを掘り下げたところ、古墳時代後期の地表面で、鉄製三葉環頭大刀柄頭が検出された（図2・3・4）。

出土した柄頭は、円環状の柄頭の内側に三つ葉状の文様を持つ。装飾大刀の柄頭である。装飾大刀は、とくに古墳時代後期に流行する副葬品の一つで、所有者の地位、ヤマト王権や朝鮮半島との関係性などを示すものとされる。今回の三葉環頭の出土は、日本列島最南端の出土事例となる。三葉環頭大刀は前方後円墳や円墳といった、いわゆる「古墳」から出土することが多く、成川遺跡のような土墳墓群からは初めての出土である。この柄頭は2020-1号墓の墓墳上にあり、供献されたと考えられる。この墓は再葬墓でもあり、埋葬された人物の成川集団内や薩摩半島南部地域における社会的地位の高さを示しているのかもしれない。

また、立石が調査区北西端から検出された。立石は成川遺跡の埋葬址の特徴の一つであり、第2次調査の際にも検出さ

れている。当時は根元に弥生時代後期の壺が供えられていたことから、立石は弥生時代に立てられ墓に関係すると考えられた。今回検出した立石の根元には入来Ⅱ式の壺が供献されており、弥生時代中期には石が立てられていたことがわかる(図4)。他にも、大型壺が調査区北側の高まったテラス状平坦面の縁部から、少なくとも5つが検出された(図5・6・7)。一部は、壺の底部に穴があけられている。加えて、第2次調査でも検出された板石堆積群が7トレンチ東側から検出されている(図6)。

今回の発掘調査で、墓は合計4基が検出された(図8～13)。2020-1号墓は再葬土壙墓である。2020-2号墓は1次葬の土壙墓である。この2基は古墳時代の墓と考えられ、人骨の取り上げ作業まで行った。それぞれ、1体ずつが埋葬されている。両墓とも副葬品は遺存していない。2020-1号墓の土壙墓上には、上述の通り鉄製三葉環頭大刀柄頭が供献されていた。2020-3号墓と2020-4号墓は人骨や歯が検出されたので墓と認定したが、今回の発掘調査ではそれ以上の調査は行わず、埋め戻した。次回の調査で、発掘を行う予定である。

3. おわりに

2020年調査の成果をまとめると、土器、鉄製三葉環頭大刀柄頭を含む鉄器、立石、土壙墓および板石堆積群が検出された。土壙墓は4基発見され、古墳時代人骨も出土している。2020-1号墓は再葬土壙墓である。成川遺跡では確実に再葬墓といえる初めての例となる。古墳時代後期の地表面に並ぶ大型壺が土器棺として使われたのであれば、再葬が古墳時代後期の成川遺跡でも一般的であったと言えることになる。土壙墓での一次葬が、古墳時代後期には再葬へと埋葬スタイルが変化したとの仮説も考えられる。種子島の広田遺跡南地区では一次葬から古墳時代後期に集骨再葬に変化している。今回の成川遺跡の発掘調査で、一次葬から古墳時代後期での再葬への変化が確実に言えるようになれば、薩摩半島南端と種子島で埋葬スタイルの変化が共通して起こっていることになる。他にも、立石周辺の埋葬や祭祀実態および板石堆積群の意味が明らかになる可能性が高い今回の成川遺跡の発掘調査が待たれる。今後、第4次2020年発掘調査で出土した遺物や古人骨を整理し、概要報告、発掘調査の正式報告を行っていきたい。

謝辞

発掘調査の際、成川集落のみなさまには多数の助言や助力を賜った。また指宿市教育委員会には、調査をはじめ遺跡現地説明会や大成小学校5年生の校外学習などに関する様々な便宜を図っていただいた。三葉環頭柄頭については、朝日新聞社・宮代栄一氏、島根県立松江北高等学校・大谷晃二氏、山口大学・齋藤大輔氏、九州文化財研究所・西谷彰氏および明治大学・谷畑美帆氏から様々なご教示をいただいた。テフラについては、成尾英仁氏から有益な助言をいただいた。記して、深甚の謝意を表す。

本発掘調査は JSPS 科研費 JP19H05352 の助成により行われた。

引用文献

- 鹿児島県教育委員会 編 (1983) 成川遺跡。鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書24。鹿児島県教育委員会。
河口貞徳、河野治雄、重久十郎 (1958) 成川弥生式群集墓。考古学雑誌43:34-42。
竹中正巳・大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣・中摩浩太郎・鎌田洋昭・新垣匠 (2020) 成川遺跡第4次発掘調査速報。鹿児島女子短期大学紀要57:1-2。
田村晃一編 (1974) 成川遺跡。埋蔵文化財発掘調査報告第7。文化庁。吉川弘文館。

(2020年12月25日 受理)



図1 成川遺跡遠景（丸囲：埋葬址）



図2 成川遺跡第4次2020年発掘調査区
（調査区全体：7トレンチ，左：5トレンチ，右：6トレンチ，○：鉄製三葉環頭大刀柄頭出土地点）

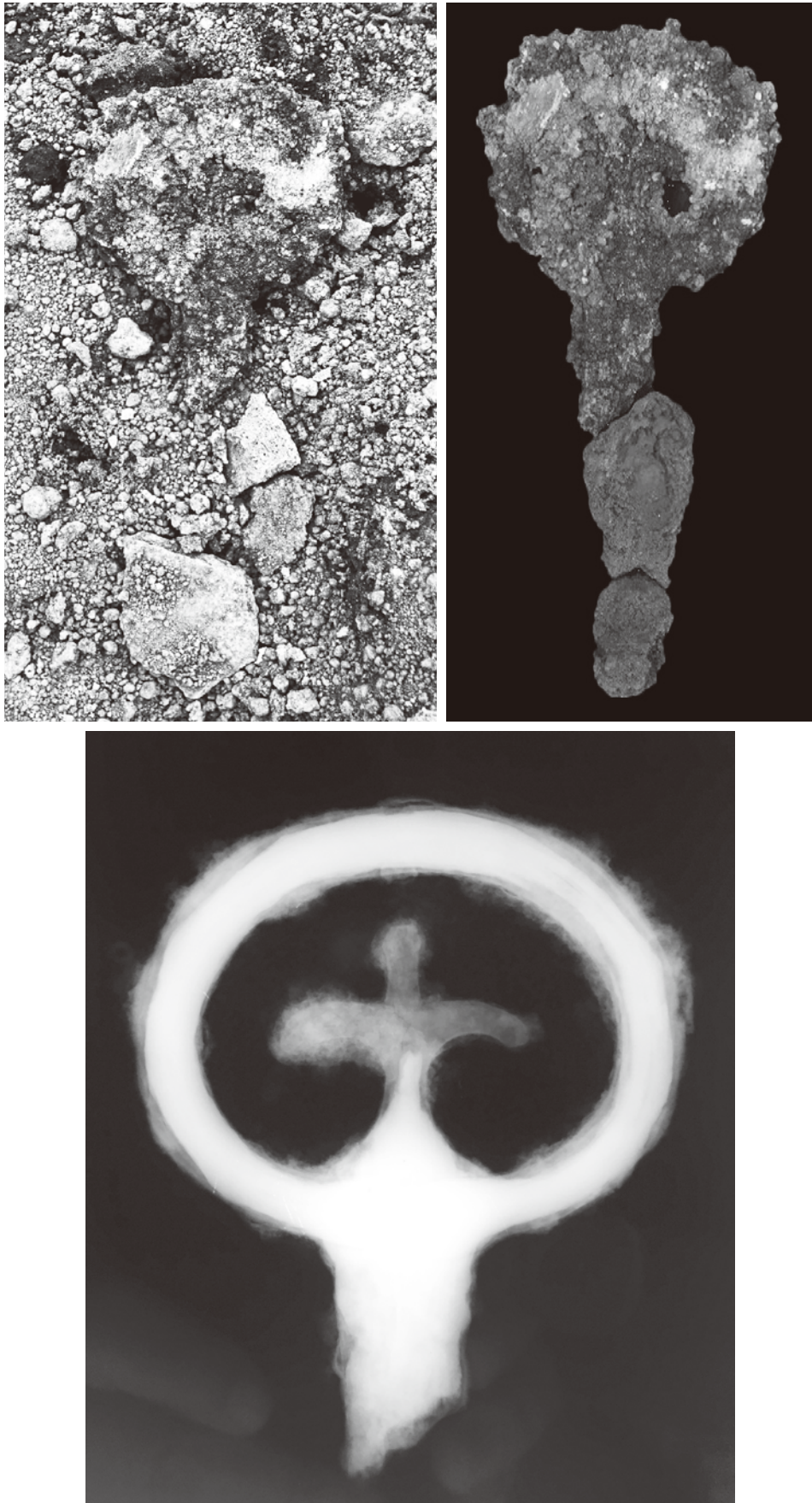


図3 鉄製三葉環頭大刀柄頭（成川遺跡第4次2020年発掘 2020-1号墓壙上）
（上左：検出時，上右：検出後，下：レントゲン写真）



図4 立石の検出（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ北西端）（立石の根元には入来Ⅱ式の壺）



図5 大型壺の検出（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ中央から北側にかけての平坦面）



図6 板石堆積群の検出（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ東側）



図7 成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ西側半分)



図8 立石と2020-1号墓との関係（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ北西側）



図9 2020-1号墓（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ）



図10 2020-1号墓中の頭蓋と前腕（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ）



図11 2020-2号墓検出状況（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ）
（2020-2号墓は2020-1号墓の下から検出された）



図12 2020-2号墓人骨（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ）



図13 2020-3号墓・4号墓検出状況（成川遺跡第4次2020年発掘 7トレンチ）
（左楕円：2020-3号墓，右楕円：2020-4号墓）